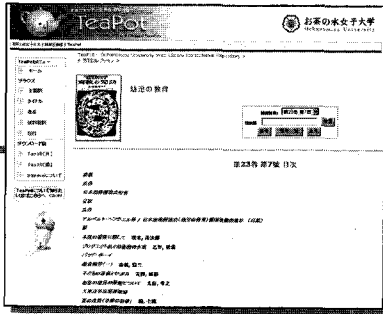


## ▶『幼児の教育』ネット公開に寄せて (6)

# 実習指導今昔

恒川 直樹



お茶の水女子大学附属図書館の WEB サイト  
内の「お茶の水女子大学教育・研究成果コレ  
クション (略称 TeaPot)」にてバックナン  
バーインターネット公開中。  
URL : <http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>

保育者養成校に勤めて三年余り、実習指導にも直接  
間接に携わってきました。そこで今回、ネットで手軽  
に閲覧可能になった『幼児の教育』誌を検索するにあ  
たって、最初に試してみたキーワードは「実習」でし  
た。ちなみに執筆時点では、公開されている号の刊行  
年次の関係からか「実習」ではヒットせず、旧字体の  
「實習」で四十二件の該当がありました(二〇〇八年  
十二月末現在。本稿では記事タイトルなどを除いて、  
原文を新字新仮名遣いに改めて引用します)。

四十二件の約半数は、その年度の「保育実習科卒業  
生」の名簿や集合写真、あるいは生徒募集の記事など  
ですが、昭和初期の実習指導の特集や実習生による文  
章なども含まれ、当時の実習の息づかいが伝わってき  
ます。

本稿では、現代の実習にまつわる私感も交えながら  
検索した記事から、興味深く読んだものをいくつか紹  
介したいと思います。

## 実習生による記事から

まずは、当時の実習生自身が書いた文章を二つ取り上げてみます。

「観察話二つ 一ぼうふら」 保育実習科

幼児の教育第三十七巻第六号

一九三七年六月発行 四十七〜四十八頁

「この二つの観察話二つは保育実習科生の作でありませす。御批評下さいませ（編集部）」という紹介と共に、虫を幼児に示しながら、その形態や一生について解説する話が載せられています。一部を引くと、ぼうふらが蚊になるという説明の後にこう続きます。

だからね、ここにいるぼうふらさん達はお父様やお母様と一緒にいるのでは無いわけです。皆子供ばかりなの。若しかするとぼうふらさんの幼稚園かも知れ無いわね。一寸ぼうふらさんに聞いて見ましょ

うか。「もしもしぼうふらさんぼうふらさん、そこはぼうふらさん達の幼稚園ですか」……そうですね、って云っています。皆楽しそうに泳いで遊んでいます。お兄様のぼうふらさんは明日位になるともう大人になってしまうの、早いでしょ。そしてあのチクンとさず蚊になってぶんぶんこの瓶の中を飛び回っていますよ。（四十八頁）

保育者の一人語りの形式で書かれた、逐語的保育案のようなもので、保育の場で実践に供されたかどうか分かりませんが、「めだかの学校」ならぬ「ぼうふらの幼稚園」という発想には意表を突かれました。夏場、誰もが悩まされる蚊ですが、ぼうふらまでも気に留めることはまずありませんし、あつても、せいぜい駆除の対象としてでしょう。擬人化といえればそれまでですが、こんな視点からのんびり、じつくりとぼうふらを見つめるのは、今も変わらず幼児と保育者が生き

ている時間の流れなのではないでしょうか。

「實習日記から（讀者より）」 北原時枝

— 幼児の教育第三十四卷第二号

一九三四年二月発行 六十四〜六十六頁

東京のある幼稚園で、長期にわたり實習を行つてゐる實習生の日記です。一学期の實習を経て、二学期の日記の中から抜粋されています。日々の子どもたちの様子や遠足のことなど、保育全体の面白さや喜びに混じつて、一人ひとりの子どもへのまなざしや思いをつづつた文章もあり、読み応えがあります。

十月六日 Kさんは、近頃だんだん素直になつて、私のそばに寄つて来る様になつた。そして何かして遊びたい様に見える。此の時ぞと私は一層朗かに遊んで上げた。なるべくKさんの心に合う様にと努めた。すると他の子等が寄つて来て邪魔をする。こんな時は本当に困つてしまふ。Kさんはまだ一般の子

等と遊ぶだけ馴れていない。自然に皆んなの中に入り遊べる様にして上げ様と思ふのに、他の子に言い聞かせてもわからない。今日は本当に困つてしまつた。どうしたらよいのかしら。（六十五頁）

Kさんはこの實習生にとつて気になる子だつたようで、その時どきで周囲に対して好悪両極端の態度をあらわにするKさんの姿、そして、自分自身が抱くKさんへの「腹立て」「悪しみの心」なども、率直に見つめた記述が、十二月の日記にも記されています。

このような経験は、現代の實習生もぶつかる壁の一つであり、学生たちはしばしば、しかしおずおずと口にします。「おずおずと」というのは、特定の子どもに肩入れしたり、愛すべき子どもに対して腹立ちや疎ましきなど、ネガティブな感情をもつてしまつたりすることは、なかなか受け止め難い事態なのでしょう、筆者が講義中に、自分の同種の経験や対人関係の理論

を話して初めて、ためらいがちにうなずきながら打ち明ける学生も少なくないからです。

子どもが好きという保育者の基本感情は今も昔も、また実習生も現役保育者も変わりません。けれども、その気持ちの粘り強さは、子どもたちとの日々のお会いの中で、肯定的な感情のみならず、自分自身の負の情動とも直面しながら、それらをおり込んで練り上げられていくものなのでしょう。この実習生は「保姆というものは楽しいものだが、むずかしいものだ」と、しみじみ思った」とも記しています。この言葉が腹の底から出るようになることが、ある意味では実習生としてのゴールであり、そして実践者としてのスタートなのかもしれません。次に、その実習生を育てる側の言葉にも耳を傾けてみます。

### 実習指導に関する記事から

一九四四年に本誌が休刊する直前の一年程は、戦争

激化の下、保育現場も激動した時代でしたが、実習の課程も大きく変化しました。本誌には特集号も含め、実習関連の記事が多数掲載されています。

それらを総覧すると、かねてからの保育界の要望に「戦時保育」という時局の要請が加わって、より重視された保育実習の指導に関して、各地の保育現場が非常に苦心して対応する様子がわかります。師範教育令の改正に伴い、実習指導が新たに職務として規定された師範学校附属幼稚園からは、大量の実習生を受け入れる苦勞や工夫がつづられ、また高等女学校は戦時託児所を附設して実習を行うなど、制度改革のただ中にある現場の声が生々しく感じられます。

#### 「保育実習の指導」

幼児の教育第四十四巻第七号

一九四四年七月発行 一〇三頁

この特集は、高等女学校での保育実習必修化を念頭

に置いて、冒頭に倉橋惣三が「保育實習指導概要」として筆を執り、その他の著者によって各保育項目について具体的な指導論が述べられています。

保育指導の大多の第二は、幼児の保育法の要諦を把握させることであるが、これも普遍的な保育理論から導いたり、余り細い保育技術を初めから授けたりするよりは、生徒自身が教養ある青年女性として持っている幼児への情愛と常識とを、素直に、殊にみずみずしく発揮させることから出発したい。理論や方法の普遍規格のみを気にして、どうすべきか、どうしなければならぬのかといった風な思索ばかりさせて、折角の情愛と常識とを抑えさせたり閉ざさせたりしてはならない。殊に、そんな形式的指導に過ぎて、情愛のあたたかさもなく、常識のなまなましさも無い、「冷いから誤らない」といった癖をつけては大変悪いことである。(一頁)

倉橋のこの姿勢は、現在でも実習指導の根底に基本的に共有されているように思います。一方で、こうした「情愛のあたたかさ」や「常識のなまなましさ」といった語は、一見すると、倉橋自らが対置しているように「理論や方法の普遍規格」と相いれない印象を与えるのも事実です。実際、実習生への期待を込めた評価として実習園から時折うかがうのも、「子どもとよく遊べるが、技術が伴えば……」、「知識はあるがまだ子どもになじめない」という両側面のバランスの問題です。ここで、倉橋は出発点としては「情愛」を重視しています。ただ次の文章を読むと、いずれに重心を置くかという問題設定を超えて、保育の両輪であるこの両側面をつなぐ軸となるのが、保育者としての専門性なのではないかと考えさせられます。

朝次々に迎える幼児を一目見て、その健康の状態に気がつかなくてはならない。全体の健康は勿論、目や鼻や耳の部分々々まで、精確な診断はあとで丁

寧にしたり、専門家を俟つとして、兎に角く異常がないかということには、直感的に気がつくように慣らされなければならない。(中略) こういうことは、慣れることによってよく出来るが、その根本となるものは、親切の有無深淺に基く。しんみのじつがなくしては、保育は出来ない。指導して、日に日に子どもへのじつの出来るようにしたい。しんみに世話の出来るようにしたい。(二頁)

ここでいう「しんみのじつ」は先の「情愛」と似ていますが、それ以上の意味を含んでいると私は考えます。「情愛」が実習生の人として自然に育んできた「子ども一般が好き」という基本感情だとすると、「しんみのじつ」は、その情愛が、先述の実習生にとってのKちゃんのように、固有名をもった「この子(たち)」と出会いかわることを通じて練り上げられた、保育者としての粘り強い情愛なのではないでしょ

うか。そうした深い配慮性があって初めて「いつもの○○ちゃんとか違う」と、一目見て直感的に気づくことができるものでしょう。実習の意義深さは、養成校で学んだ理論や方法を子ども一般の姿で確認・練習するだけでなく、ほかならぬ眼前のこの子に対して親身になってかわわり、喜びと共に困難をも味わうことを通じて、知識や技術の重みを感じることにあると思います。

保育者の免許資格制度が改革のさなかにある今日、私たちは実習の在り方という、この古くて新しい問題を、どう問い直すべきなのでしょうか。指導に携わるわが身を振り返ると、ひとりの人間としての実習生<sup>II</sup>学生に対して、粘り強い「しんみのじつ」を発揮できているかという点、実に心許ない限りです。「育てる」という意味では、指導教員の課題も、実習生の課題と案外近いところにあるようです。

(常磐会短期大学)